

〔書評と紹介〕

小口雅史編

『古代東アジア史料論』

坂上 康俊

本書は、『古代国家と北方世界』『律令制と日本古代国家』に続く三冊目の、そして最後の小口雅史氏還暦記念論集であり、前二書については、既に『法政史学』九一号（二〇一九年三月）誌上に、それぞれ小倉真紀子・武井紀子両氏による書評が、また六一書房のサイトに、それぞれ浜田久美子・神戸航介両氏による書評が載っている。評者は第二論文集に寄稿させていただいたが、今回は編者よりじきじきに「辛口になることは覚悟しているが」と求められ、目次を拝見して「丁寧に読んで絶対に損はしない」と確信して紹介を引き受けた次第である。その目次は以下のとおり。番号は評者が付した。

小口雅史 序―解題にかえて―

I 日本古代の典籍

① 須原祥二「『日本書紀』の「重出」記事―皇極紀・斉明紀・天智紀の検討―」

② 荊木美行「『新撰姓氏録』抄本をめぐる問題―「三例」の記載を中心に―」

③ 大津 透「『令集解』研究の回顧と展望」

④ 小倉慈司「『延喜式』巻九・一〇の写本系統」

⑤ 石田実洋「『左経記』の古写本について」

⑥ 佐藤 信「平安時代の東国仏教と国分寺」

II 日本古代の写経・木簡・文書等

⑦ 藏中しのぶ「碑文」体の伝の「銘」と檀像

―大安寺三碑と空海撰『故僧正勤操大徳影讃并序』―

⑧ 渡辺晃宏「若狭国の荷札木簡と海産物貢進」

⑨ 春名宏昭「南家一切経と北家一切経」

⑩ 野尻 忠「奈良国立博物館所蔵『華嚴経』巻第七十（紫紙金字）について」

⑪ 磐下 徹「仁寿三年大和国宇陀郡佐山郷長解と「天平元年大税牒」

III 古代東アジア史料

⑫ 井上 亘「古代教育史三題―出土資料からみた漢代の授業法と教材―」

⑬ 榎本淳一「九州国立博物館蔵「晋書列伝卷五十一零卷」について」

⑭ 堀内和宏「郭行節墓誌小考」

⑮ 吉永匡史「阿斯塔那五〇九号墓出土過所関係文書小考」

⑯ 辛嶋静志「「変」、「変相」、「変文」の意味」

⑰ 片山章雄「世界に拡散した第二次・第三次大谷探検隊員橘瑞超の活動・収集品情報」

⑱ 辻 正博「『政事要略』所引「会要」記事小考」

錚々たる執筆陣の力作揃いであるが、評者にとって最も興味深かったのは⑧であった。詳細な記述のある木簡と簡略な記述しかない小型の木簡とが対になっている場合、後者は「中札」と認められるとする論証も

わくわくするが、「五戸」はコザト、ないしその前身を意味するのではないかとする推論は心地よく読み進められ、納得するしかない。ただし、なぜコザトを「五戸」と表記するのか、その問題は残されている。

一方、役に立つという意味では③が薦めである。これまでは授業で井上光貞氏の『律令』での解題をベースに説明しつつ、朱についてはコメントを付けざるをえなかったが、これからは③で済ますことができる。ただし、開元三年令の将来が天平七年まで下る可能性については、せっかく古記の作者として大和長岡を推しているのとそぐわない。

文献の形態、写本系統、伝来を論じた④⑤⑨⑩⑬⑱は、いずれも精密な観察に基づいたもので、特に④⑤は今後の写本系統研究の基礎となる。⑨はほとんど並行して進められた藤原武智麻呂家と房前家の一切経の写経事業を比較して、兩人歿後の南家の勢力維持と北家の零落ぶりとを示した。⑱は筆者が最近精力的に取り組んでいる唐会要の成立過程研究の一環で、日本史料に見える漢籍逸文の効用を示す。

①②は、典籍の生成・転写過程の情景に思いを致す必要を痛感させられる。①は日本書紀の編纂の際、時に全体の文脈や使用語句の調整を欠いたことが、皇極紀・斉明紀・天智紀に見られる矛盾や重複を生んだ原因とし、②は「出自」「之後」の書き分けの検討結果から、延文五年本の方が原本に近いとするもの。

個別文書を取りあげた⑪⑮のうち、⑪の偽作とする考証は至当であり、偽造の背景に興味が持たれる。⑮は吐魯番文書の一点を取りあげ、過所発給過程の復原を試みたもの。なお⑰は、*The Times* によつて発信され、瞬く間に諸外国の雑誌に掲載された大谷探検隊（橘瑞超）の蒐集品に関

する情報を精査し、その邦訳の際の誤りを指摘している。

⑫は、「横経」「佔畢」「簡冊」とは何か、実物の検討を通じて古代中国での、講学の現場と教材とを復原してみせたもので、古代教育史に新視点を提供した。⑭は七世紀後半の羅唐戦争に従軍した郭行節の墓誌から彼の履歴を検討したもののだが、勲官に伴う授田をこの時点で規定通りに与えられたと考えて良いのだろうか。

⑦は、奈良時代の大安寺の古密教の中で高僧の肖像と伝とが作られ、この中から「賛」が生まれたと述べるが、論旨やや難解である。⑯は、漢訳仏典に見える「変」の語義は、壁画や像などのイメージを意味したが、対応する梵語にはイメージのみならず「奇妙な」「すばらしい」の語義もあり、これに「変」の文字をあてた妙を説く。「変文」って変だな、という疑問が氷解。⑥は本書のテーマからはやや外れているが、陸奥と武蔵の国分寺を取りあげ、発掘成果を交えつつ九世紀東国の国分寺の果たした役割を論じている。

以上、極めて雑駁な紹介にとどまってしまったが、記録・文書・典籍・本簡・写経・墓誌・雑誌・新聞・絵画といった様々な史料からどのような情報が引き出せるか、その成果を競っている観があり、読者諸賢には是非とも自らお目通しをお願いしたい。

(A5版、四一〇頁、同成社、二〇二〇年六月三〇日発行、本体価格八〇〇〇円＋税)

(さかうえ・やすとし 九州大学大学院人文科学研究教授)